

はじめに

この度、ベレ出版からキリスト教の歴史を概観する入門書を出版することになりました。筆者自身は日本聖公会（イングランド教会およびアメリカ聖公会をルーツとする教派）に属する牧師であり、これまで、キリスト教、特に聖公会に関連した翻訳書および著作を出版してまいりました。しかし、ともすればこれらの分野の翻訳書や著書は専門色が強く、キリスト教とのつながりのない方には用語その他の点で理解が難しいことが多かったように思います。また、私自身も含めて、日本の人々には東欧やロシア、ウクライナ等の国々に対して、ましてやそれらの地域の教会に対して馴染みがなく、最近のウクライナ問題のキリスト教的背景に関する理解が十分できていないことは否定できません。一方、最近の世界の出来事を見ますと、ロシアによるウクライナ侵攻以外にも、パレスチナ問題、カルト集団による日本政界の隠然たる支配などは、キリスト教の歴史や教義をある程度知っていなければ十分な理解ができないと思われます。

鳥瞰という言葉があります。鳥が空を飛ぶように地上の全体図をつかむという意味です。本書ではキリスト教についての鳥瞰図を提供することを目指しています。しかし、キリスト教の

歴史の全体図を理解するには、そこかしこにある目印を的確につかむことが必要です。本書ではその目印となる重要な出来事を中心に記述するように努めました。細部の正確さや専門性はある意味で棚上げすることにし、複雑な事象をわかりやすく整理します。また、キリスト教の信徒以外の方にも理解していただけるように、できるだけ客観的な記述を行うように心がけました。そのため、キリスト教という宗教の負の側面からも目をそむけないようにしました。また、キリスト教史の枠組みとなる一般史の記述にも注意を払いました。聖書の記述に依存する以外に資料がない場合には、聖書の伝承による旨を記しました。

これまで日本でもキリスト教の通史を扱った優れた著作が出版されています。最近では教文館から『キリスト教史』（菊地榮三、菊地伸二著、2005）が出ています。本書はこの本に大きく助けられていることをお断りしておきます。『宗教の世界史―キリスト教の歴史1・3』（山川出版社、2009～2013）、『総説キリスト教史1・2・3』（日本キリスト教団出版局、2007）も総合的な知見を提供してくれました。さらに、それぞれの章で、異なる時代の異なる国々でのキリスト教のあり方を教示してくれる先行の研究書があります。これらの先達に敬意と感謝を申し述べたいと思います。なお、聖書からの引用はすべて『聖書協会共同訳』によっています。

歴史を振り返るとき、それぞれの国家や文化のバックボーンを成す宗教思想がある程度知ら

なければなりません。そういう意味で、現下の錯綜する国際情勢を読み解く一つの手がかりとしていただければ幸いです。特に、一つの地続きの大陸で生まれたユダヤ教、キリスト教、イスラム教、仏教は、ヨーロッパ文化圏、イスラム文化圏、仏教文化圏と、世界史を形成する主要な原動力の一つとなっています。ですから、これらの宗教の教義や典礼、美術、政治的主張が一般史の軸となっている様子を理解すれば、世界がどのように動いてきたか、どのように動こうとしているかをより深く理解することができると思います。また、疑似キリスト教とでもいうべき新宗教や「異端」と言われる宗教団体と、伝統的キリスト教の相違点についても第12章で触れたいと思います。

激動する世界を讀者のみなさんが理解する上で本書が一助となればと願っています。